
資 料

助産師である実習指導者が母性看護学実習の実習指導に抱く想い － A施設におけるインタビューより－

小林 美穂

Feelings of Midwife clinical instructors for Maternity Nursing practice : Interviews in A hospital

Miho Kobayashi

キーワード：母性看護、臨地実習、実習指導者

key words : Maternity nursing, Clinical Practice, Clinical instructor

要 旨

助産師である実習指導者が母性看護学実習の実習指導に対して抱いている想いを明らかにすることを目的に、A施設において看護学生に実習指導を行ったことのある助産師3名を対象に半構成的面接を実施した。実習指導者が母性看護学実習に抱いている想いとして、【生命の尊さや母子の成長過程を実感することへの期待】、【母性看護学実習における学生の学びへの期待】、【学生と受け持ち母子との関係性】、【母子を対象とする看護を指導するうえでの困難や葛藤】、【学生の特性や個々の考えを尊重した関わり】、【母性看護学実習に臨む学生への印象や要望】が明らかとなった。結果より、実習指導者は、看護学生に対して、母性看護学特有の学びを期待していることが分かった。また、実習では、技術の習得よりも、母性看護を体験することで、面白さや楽しさを感じてもらうことを期待していた。そのため、実習指導者は、母性領域を経験できる数少ない機会に母性看護ならではの学びを伝えたいという想いを強く抱いていると考えられる。

受付日：2014年10月13日 受理日：2015年10月21日

日本赤十字看護大学大学院看護学研究科国際保健助産学専攻

Japanese Red Cross College of Nursing, Graduate School of International Health Midwifery Department

I. 研究の背景

母性看護学実習では、少子化による分娩数の減少や入院日数の短縮などから学生が受け持つ対象者の確保が困難となり、分娩見学や看護技術を実施する機会が減少している。しかし、母性看護学実習は、一人の人間として必要な豊かな心を養うこともできる領域（一花・福山・稲尾, 2009, p.73）としても重要であるため、実習においてより多くのことを経験することが望まれる。

母性看護に苦手意識を持つ学生は44%（菊池, 2007）と半数近くおり、母性看護学の内容を「実際のイメージがつきにくい」「特別な内容」と考えている学生も多くいる（山口, 2013, p.86）。また、一施設を対象とした研究ではあるが、母性看護学実習において9割の学生は実習に対して何らかの困難感を抱いており、その困難感には母性看護の特殊性や特徴的な看護技術に対する学生の不安が大きく影響している（三井, 2005, p.31）。そのため、母性看護学は看護学の中でも特殊な領域であり、これまであまり体験したことない分野であることから、講義で学んだことが実際のケアに結びつきにくい領域であることが推測される。

看護師の基礎教育課程にある母性看護学の領域は、看護師に加え、周産期のケアを専門的に学んでいる助産師が携わっている。そのため、母性看護学実習を行う実習施設では、看護職の中でも、特に助産師が実習指導に関わる機会が多くあると考えられる。保健師助産師看護師法において、「看護師とは、厚生労働大臣の免許を受けて、傷病者若しくはじよく婦に対する療養上の世話又は診療の補助を行うことを業とする者をいう」と定義されているように、看護師にも褥婦に対する看護を行う能力が求められている。そして、褥婦に対する療養上の世話がができるために看護師としてどのようなことまでできていけばよいかを明らかにしていくことが必要とされている（新井・中里・後藤, 2004, p.1105）。先行研究では、母性看護学実習に関して、学生の体験した内容や実習への要望等を調査している研究が紀要や抄録では報告されているが、学会誌で報告されている研究は少数であった。また、母性看護学実習の指導に携わる助産師の考えを明らかにしている研究（中村, 2001）は1件あるが、これは2009年看護基礎教育カリキュラム改正前のものであり、それ以降に調査された研究は見当たらない。したがって、学生が褥婦に対する療養上の世話を習得するための母性看護学実習における実習指導者の考えは明確にはなっていない。周産期領域において、助産師と看護師とでは、求められるケア能力は異なる中で、看護師の基礎教育である母性看護学実習の指導を行う助産師の抱く想いを明らかにすることは、実習指導者にとっても

母性看護学で指導する範囲がある程度理解でき、今後の実習指導に役立つのではないかと考えられる。また、学生にとってはイメージしにくい母性看護の内容を理解する一助となると考える。以上より、本研究は助産師である実習指導者が母性看護学実習に対して抱いている想いについて明らかにすることを目的とした。

II. 研究目的

A施設におけるインタビューから、助産師である実習指導者が母性看護学実習に対して抱いている想いについて明らかにすることを目的とする。

III. 用語の定義

母性看護学実習：褥婦や新生児に対してケアを行う実習

実習指導者：母性看護学実習において病院や産院で妊産褥婦や新生児の看護について実習指導を担当する助産師

IV. 研究方法

A. 研究デザイン

質的記述的研究デザイン

B. 研究参加者

母性看護学実習において、看護学生に実習指導を行っている、もしくは行ったことがあり研究の趣旨に賛同し了承が得られた、A施設に勤務する助産師3名とする。

C. データ収集方法

2013年8月にデータ収集を行い、一人につき、30～45分程度の半構成的面接を実施した。インタビューを始める前にフェイスシートを用いて参加者の基本的な情報を収集し、その後、母性看護学実習の指導における困難感や悩み、学生への配慮等についてインタビューガイドを用いながら、インタビューを実施した。インタビュー内容は、本人の了承を得て、ICレコーダーに録音またはメモをとった。

D. データの分析方法

すべてのインタビュー内容を逐語録に起こしデータとした。データの中から、研究参加者が母性看護学実習に対して抱いている想いがよくわかる部分を抽出し、類似しているものを、カテゴリー化して分析を行った。

E. 倫理的配慮

本研究は日本赤十字看護大学研究倫理審査委員会（承認番号2013-61）とA施設の看護研究倫理審査会の承認を得たうえで実施した。研究参加者には文書を用い、口頭で研究の目的・方法を丁寧に説明した。また、

自由意志による参加であること、研究参加同意後もいつでも辞退が可能であること、またそれに伴う不利益は一切生じないこと、個人情報保護に努めることを説明した。

V. 結果

A. 研究協力施設および研究参加者の概要

研究協力施設であるA施設は、関東圏内にある周産期母子医療センターであり、実習施設として看護学生と助産学生、双方の実習を受け入れている。研究参加者は、A施設の褥婦棟に勤務する助産師3名であり、参加者全員、看護学生と助産学生両方への実習指導の経験がある。年齢は30~40歳代、経験年数は9~18年、実習指導者としての経験年数5~10年であった。

B. データ分析結果

インタビューデータの分析結果は表1に示す。得られたインタビューデータは、6つの大カテゴリで構成されていた。6つの大カテゴリは、【生命の尊さや母子の成長過程を実感することへの期待】、【母性看護学実習における学生の学びへの期待】、【学生と受け持ち母子との関係性】、【母子を対象とする看護を指導するうえでの困難や葛藤】、【学生の特性や個々の考えを尊重した関わり】、【母性看護学実習に臨む学生への印象や要望】である。これら的大カテゴリに沿って、以下に、研究参加者の語りをもとに、特徴のある内容について説明していく。なお、大カテゴリは【 】、中カテゴリは〈 〉、インタビューデータは丸ゴシック体で表記している。

ク体で表記している。

1. 生命の尊さや母子の成長過程を実感することへの期待

【生命の尊さや母子の成長過程を実感することへの期待】は、〈人が誕生し成長していく過程を知り、命の大切さを感じてほしい〉、〈実習を通して、自分自身も両親をはじめとする多くの人の愛情を受けて育ってきたということを知ってほしい〉、〈母子と関わる中で、一人の女性が母親になる過程や新生児の変化を感じとってほしい〉、〈母親や児が変化していく過程を見ることで、母性でしか味わえない面白さや楽しさを知ってほしい〉の4つの中カテゴリで構成されていた。以下に、〈実習を通して、自分自身も両親をはじめとする多くの人の愛情を受けて育ってきたということを知ってほしい〉に関する語りを示す。

どこに進むにしても、自分がこうやって生まれ育ち、ここまで大きくなったのには、これだけの人たちの情熱や想いや一生懸命が積み重なっているんだってことを最低限知ってほしいなど、それが感じられるだけでリプロダクティブヘルスを学んだことにもなるだろうし、これからの人生違うと思う。

研究参加者は、児が妊娠期から大切に育てられ、母親が必死な想いで出産していることを理解することで、学生に命の大切さを実感してほしいと期待していた。その中でも、実習を通して、自分自身の生い立ちを振り返り、自分も両親をはじめとする多くの人の愛情を受けて育ってきたということに気付いてほしいと語っていた。

表1. 分析結果

大カテゴリ	中カテゴリ
生命の尊さや母子の成長過程を実感することへの期待	人が誕生し成長していく過程を知り、命の大切さを感じてほしい 実習を通して、自分自身も両親をはじめとする多くの人の愛情を受けて育ってきたということを知ってほしい 母子と関わる中で、一人の女性が母親になる過程や新生児の変化を感じとってほしい 母親や児が変化していく過程を見ることで、母性でしか味わえない面白さや楽しさを知ってほしい
母性看護学実習における学生の学びへの期待	技術の向上よりも、母子と接することによってコミュニケーション能力を身につけてもらいたい 授業で習ったことを踏まえて母性の領域を体験してもらいたい 看護学生が乳房ケアに介入することは難しいが、母親の了承を得たうえで触って学ぶことはできる 実習施設の産科の特性を理解して実習に臨むことで、専門的なケアを学ぶことができる 成人で必要とされる看護実践とは違いできる内容は限られるが、ケアの目的を考えた上で看護技術を実施することはいいことだと思う
学生と受け持ち母子との関係性	人の役に立ちたいという思いがあり、積極的に対象者と関わる姿勢がみえる 学生は母子の変化を母親と同じ目線で感じ、共感できる立場にあり、それが母親たちの支えになっている 学生はひとりの対象者を毎日受け持つため、スタッフよりも対象者との信頼関係を築くことができる 学生は母子に何かをしてあげたいという思いが強いが、それが母子にとって必要でないこともある 学生の判断で授乳状況を伝えてしまうことで、信頼関係を失ってしまうかもしれない 産後の母親は休息も必要であることを理解し、関わるタイミングを考えてもらいたい 成人の実習とは違い、健康な人へのケアは学生が悩むところでもあると思う
母子を対象とする看護を指導するうえでの困難や葛藤	母親の活動と休息のバランスを理解してもらうことが難しかった 産科のケアは助産師にしかできず、自分は母子の役に立っていないと思っている学生に対する指導に悩んだ 男子学生の受け持ちを決めるのが難しかった 学生にはケアを実施してもらいたい、実習指導者の数が少なく、ケアを実施させてあげられないことに葛藤があった
学生の特性や個々の考えを尊重した関わり	これまでの実習状況や学生の特性を把握し、個々に合った指導を心がけている 学生自身が考えた看護学生としての役割を実践することができるようにサポートしたい 学生の考えを引き出せるように配慮し、少しでも実習の目標を達成できるように関わりたい 学生との会話を通して、心の中にある学生の実習目標をなんとなく察する 学生はケアを行うタイミングを悩むことが多いから、ケアのタイミングも声をかけようと思っている
母性看護学実習に臨む学生への印象や要望	母性の実習に来る学生は、興味がある人と、そうでない人の両極端がいる 実習目標が明確でない学生が多い やる気をもって実習に来てほしい 母子が健康で、幸せになることを願う心をもって、実習に来てほしい 実習前に事前学習をしてきてほしい

2. 母性看護学実習における学生の学びへの期待

【母性看護学実習における学生の学びへの期待】は、〈技術の向上よりも、母子と接することによってコミュニケーション能力を身につけてもらいたい〉、〈授業で習ったことを踏まえて母性の領域を体験してもらいたい〉、〈看護学生が乳房ケアに介入することは難しいが、母親の了承を得たうえで触って学ぶことはできる〉、〈実習施設の産科の特性を理解して実習に臨むことで、専門的なケアを学ぶことができる〉、〈成人で必要とされる看護実践とは違いできる内容は限られるが、ケアの目的を考えたうえで看護技術を実施することはいいことだと思う〉の5つの中カテゴリーで構成されていた。以下に、〈技術の向上よりも、母子と接することによってコミュニケーション能力を身につけてもらいたい〉に関する語りを示す。

技術をやるということから、コミュニケーション能力を高めようとする事へと、シフト変換すると何もできなかったと思う実習に比べ、とても充実した実習になると思う。

研究参加者は、母性看護学における看護技術が他領域の実習とは異なることを認識したうえで、学生には、母性の実習でしか体験できないことを体験してもらうことを期待していた。また、直接的なケアを行うことだけが実習の目的ではなく、母親と一緒に悩んだり、喜んだりすることも、大切なケアのひとつであることが語られていた。

3. 学生と受け持ち母子との関係性

【学生と受け持ち母子との関係性】では、研究参加者は、学生の対象者との関わりや対象者にとっての学生の存在について〈人の役に立ちたいという思いがあり、積極的に対象者と関わる姿勢がみえる〉、〈学生は母子の変化を母親と同じ目線で感じ、共感できる立場にあり、それが母親たちの支えになっている〉、〈学生はひとりの対象者を毎日受け持つため、スタッフよりも対象者との信頼関係を築くことができる〉という肯定的な思いを抱いていた。

お母さんや赤ちゃんの変化を、お母さんたちと同じ目線で感じ取り、それを同じ気持ちで共感できる立場にあるので…(中略)、共感し、認めてあげたり、一緒に感動したりしてくれる存在がいるっていうことが、もうすでにケアになっているので、それも看護実践であり、実習生たちは、それを自然にやっていますばらしいなと思います。

一方で、〈学生は母子に何かをしてあげたいという思いが強いが、それが母子にとって必要ではないこともある〉、〈学生の判断で、授乳状況を伝えてしまうことで、信頼関係を失ってしまうかもしれない〉、〈産後の母親は休息も必要であることを理解し、関わるタイミングを考えてもらいたい〉といった否定的な思いもみられた。

学生はいつも対象者の傍にいたいと思っているけれども、それが対象者にとっていい効果を生む時もあるし、生まない時もあるから、その距離感に関しても配慮してほしいと思います。

また、〈成人の実習とは違い、健康な人へのケアは学生が悩むところでもあると思う〉という思いもあり、指導者は、健康な人に対する看護を行う難しさも理解していることが分かった。

4. 母子を対象とする看護を指導するうえでの困難や葛藤

【母子を対象とする看護を指導するうえでの困難や葛藤】は、実習指導の体制や対象者の選定に対する困難感として、〈学生にはケアを実施してもらいたいが、実習指導者の数が少なく、ケアを実施させてあげられないことに葛藤があった〉、〈男子学生の受け持ちを決めるのが難しかった〉という思いがあった。また、学生への指導における困難感として、〈母親の活動と休息のバランスを理解してもらうことが難しかった〉、〈産科のケアは助産師にしかできず、自分は母子の役に立っていないと思っている学生に対する指導に悩んだ〉という思いがあった。以下に、〈産科のケアは助産師にしかできず、自分は母子の役に立っていないと思っている学生に対する指導に悩んだ〉に関する語りを示す。

一人の学生さんは、多分興味はあって、赤ちゃんとお母さんに何かしたいっていう思いは強かったけれども、助産師しかできないっていう固定観念にとられていて、自分が役に立っていないんじゃないかという思いを始めから最後まで拭えずに、その気持ちが拭えないまま過ごしてしまったことがあって、その子にどうフィードバックするべきかなと悩んだことがありました。

学生自身は対象者に何かをしてあげたいという思いが強いが、母性におけるケアが助産師にしかできないという固定観念から、自分が役に立っていないのではないかと悩んでおり、そんな学生に対する指導に研究参加者は悩んでいた。

5. 学生の特性や個々の考えを尊重した関わり

【学生の特性や個々の考えを尊重した関わり】は、〈これまでの実習状況や学生の特性を把握し、個々に合った指導を心がけている〉、〈学生自身が考えた看護学生としての役割を実践することができるようにサポートしたい〉、〈学生の考えを引き出せるように配慮し、少しでも実習の目標を達成できるように関わりたい〉、〈学生との会話を通して、心の中にある学生の実習目標をなんとなく察する〉、〈学生はケアを行うタイミングを悩むことが多いから、ケアのタイミングも声をかけようと思っている〉の5つの中カテゴリーで構成されていた。以下に、〈これまでの実習状況や学生の特性を把握し、個々に合った指導を心がけている〉に関

する語りを示す。

やる気がある子には助産師学生と同じようにちょっと考えてみて投げかけて、いったん自分で考える時間を作って、それをもとに一緒に見にいっているし、あまり興味がない子には、一緒に考えたりとか、その子が得意な…例えば、看護過程や人と接することや人をケアすることとかを伸ばせるようにアレンジしたりしています。

研究参加者は、これまでの実習状況を教員から聞いたり、学生と関わることでその学生の性格や特性を把握したうえで、学生の個別性に合わせた指導を心がけていた。また、実習指導をするうえで、学生が実習の目標を達成できるように、言葉かけをしたり、雰囲気づくりをしたりして、学生が自分の考えを引き出せるように配慮していることがわかった。

6. 母性看護学実習に臨む学生への印象や要望

【母性看護学実習に臨む学生への印象や要望】では、学生に対する印象として、〈母性の実習に来る学生は、興味がある人と、そうでない人の両極端がいる〉、〈実習目標が明確でない学生が多い〉という想いがあった。そして、実習に来る学生に望む想いとして、〈やる気をもって実習に来てほしい〉、〈母子が健康で、幸せになることを願う心をもって、実習に来てほしい〉、〈実習前に事前学習をしてきてほしい〉という想いがあった。以下に、〈実習前に事前学習をしてきてほしい〉に関する語りを示す。

母性ってすごい興味がある子と一応来たいな子がいて、やる気がある子は見ているとよくわかっていて…、(中略) 興味のない子も、基礎的な褥婦や赤ちゃんのバイタルの正常値だったり、母性は変化が大きいので、一週間のうちに子宮底がどうなるか赤ちゃんの体重がどうなることが一般的であるってこととか、お母さんに起こりやすい精神的な状況の一般的なものを、とりあえずそこが最低ラインで勉強してきてもらいたい。

研究参加者は、学生と関わる中で、母性に興味がない学生がいることも十分理解しているが、実習には積極的な姿勢で臨んでほしいと想っていることがわかった。また、実習目標を明確にし、事前学習を行ったうえで、実習に来ることを望んでいた。

VI. 考察

A. 実習指導者の母性看護学実習に対する期待

母性看護学は妊産褥婦および新生児への看護活動に加え、次世代の健全育成をめざし、母性の一生を通じた健康の維持・増進、疾病予防を目的とした看護活動である(森, 2013, p.2)。本研究の研究参加者は、母性看護学の実習は他領域の実習とは異なるという認識を持っており、実習において母性看護学実習特有の学

びを看護学生に期待していた。特に、褥婦や新生児への看護活動を見学することを通して、母性に興味を持ち、命の大切さや両親の子どもに対する想いなど、母性の実習でしか学ぶことができない様々な想いを感じてもらうことを期待している。先行研究において、実習指導者は、「看護学生は助産師学生とは違い、人生にたった一回か二回の分娩の見学や褥婦と新生児を受け持った看護である」(主濱・刀根・鈴木, 2012, p.62)と認識している。そのような認識から、母性看護学実習は母性領域を経験できる数少ない機会であると捉えており、その機会に母性看護ならではの学びを伝えたいという気持ちが強くあると考えられる。

実習指導をするうえで感じる想いの中には看護学生の対象者との関わりに関する記述が多いことから、実習指導者が学生指導の際に、対象者への直接的なケアの実施に着目しているのではなく、対象者との関わり方に着目していることがわかる。看護基礎教育卒業時に求められる態度の構成要素の中に、〈人間関係の基盤となる心構え〉があり、看護は人間を対象とする職業であることから、看護師として人間関係を形成できる能力が求められている(柿澤・矢島・大野, 2012, p.54)。そのため、対象者とのコミュニケーション能力の向上は、他領域の実習においても重要課題であるが、母性看護学実習の実習指導者も重視していることが推測される。また、実習指導者は、学生が母子と積極的にコミュニケーションを図ろうとしている姿に好感をもっており、そのような関わりが母子の支えになっていると感じている。そのため、母性看護学実習において、学生は母親の精神的な援助に重点を置いて関わることで、学生自身が母子にとってよりよい存在となっていることを理解することができると考えられる。専門的なケアを学ぶことも大切であるが、看護技術をやることばかりにこだわらずに、精神的な援助も産後の関わりの中で重要であることを知り、精神的な援助に重点を置いて関わっていくことも大切であると考えられる。

B. 個々の学生を尊重した実習指導

研究参加者は、実習指導の際に学生の特性や考えを把握し、学びたいことが学べるように配慮していた。臨地実習指導者の指導観を明らかにした研究では、「学生の達成感・満足感を大切にする」指導をしたいと考えており、指導方法としては、「学生との関係作りを重視する」「学生一人ひとりをよく見る」という姿勢で指導をしていた(千葉・中垣, 2011, pp.33-34)。また、佐々木(2015)の研究では、実習指導における臨床看護師の体験として、様々なタイプの学生に対して、主体性を尊重し、個別性を捉える努力をしながら指導している体験が語られている(p.31)。本研究の結果においても、学生が実習目標を達成できるような関わりや個別性を尊重した指導を行っている体験が語られて

いた。そのため、母性看護学実習においても学生の考えや意思を尊重し、個性性を考慮した関わりがなされていると推測され、そのような関わりによって、母性看護学実習が学生にとって「優しく安心できる環境の中で尊重され、理解や自立を支援され、感謝に満ちた」体験（伊藤，2010，p.141）となり、学生の実習満足度も高くなると考えられる。

C. 母性看護学実習における目標の認識

先行研究において、実習指導者は学生に生命が生まれる力強さを学んでほしいと語っている（中村，2001，p.198）。本研究においても、実習指導者は、看護技術の実施よりも、母子と積極的にコミュニケーションを図り、関わることで、命の大切さや一人の女性が母親になる過程、新生児の変化を感じてもらいたいと考えていることが分かった。看護基礎教育では、看護実践能力の強化が求められているが、母性看護学実習の指導者は、母性看護を体験し、その魅力を感じてもらうことに重点を置いていると推測される。そのため、助産師である実習指導者は、看護学生に対して、高度な能力を求めてしまうこともあるかもしれないが、指導前に看護学生の実習における到達目標を再確認し、指導にあたる必要があると考えられる。

VII. 研究の限界と今後の課題

本研究では、主に産褥期・新生児期を担当する実習指導者に焦点を当てて調査を行った。母性看護学実習は、周産期における看護について学ぶ実習であるため、妊娠期、分娩期を含めた実習指導に関する調査を行う必要がある。また、A施設では産科病棟に勤務するスタッフは全員助産師であるが、看護師が産科病棟に勤務している施設もあり、そのような環境の施設の指導者は今回の結果とは異なる意見を持っている可能性もある。

謝辞

本研究を実施するにあたり、快くインタビューに参加していただいた、A施設の助産師3名の方々には心より感謝申し上げます。また、インタビューを行ううえで協力頂いたA施設の看護部長様、看護副部長様、産科病棟の看護師長様に、深く感謝申し上げます。

なお、本研究は、平成25年度日本赤十字看護大学卒業論文を一部加筆・修正したものである。

文献

- 新井香奈子・中里佐智代・後藤美子（2004）. 母性看護技術到達度の認識に関する調査 看護師教育単独校と助産師教育併設校の臨床実習指導者の比較から. 看護教育, 45 (12), 1100-1105.
- 千葉朝子・中垣明美（2011）. 臨地実習指導者の指導時期ごとの指導観・指導方法 - 3年過程看護師養成所の実習を担当している指導者に焦点を当てて -. 日本看護学教育学会誌, 21 (1), 29-37.
- 一花詩子・福山浩美・稲尾公子（2009）. 母性看護実習における看護技術体験状況 - 学生の技術体験録より -. 埼玉医科大学短期大学紀要, 20, 73-83.
- 伊藤良子（2010）. 母性看護学実習前後の「実習に対するイメージ」の変化 SD法質問紙による授業評価の試み. 京都市立看護短期大学紀要, 35, 137-144.
- 柿澤美奈子・矢島正榮・大野絢子（2012）. 看護基礎教育卒業時に求められる態度の構成要素. 日本看護学教育学会誌, 22 (1), 47-57.
- 菊池泰子（2007）. 母性看護学に苦手意識を持たせる要因. 日本看護学会論文集看護教育, 37, 63-65.
- 三井美恵子（2005）. 母性看護学実習における看護学生が求める指導 - 実習終了後のアンケート調査結果を分析して -. 東京厚生年金看護専門学校紀要, 7 (1), 27-32.
- 森恵美（2013）. 系統看護学講座専門分野Ⅱ母性看護学2. 株式会社医学書院.
- 中村和子（2001）. 母性看護学実習にかかわる実習指導者の意識 - 実習指導に携わる助産婦の面接をとおして -. 神奈川県立看護教育大学校看護教育研究集録, 26, 197-204.
- 佐々木史乃（2015）. 看護学生の実習指導における臨床看護師の体験. 日本看護学教育学会誌, 24 (3), 27-37.
- 主濱治子・刀根洋子・鈴木祐子（2012）. 母性看護学実習において看護学生が予期せぬ状況を体験することに対する実習指導者の関わり. 日本ウーマンズヘルズ学会誌, 11 (1), 57-65.
- 山口静江（2013）. 母性看護学に対する苦手意識の形成要因と軽減要因. 日本看護学会論文集母性看護, 43, 84-87.